

開催地名	栃木県鹿沼市
開催日時	令和7年7月19日(土) 10:00~11:30
開催場所	鹿沼市消防本部
語り部	草 貴子(宮城県仙台市)
参加者	鹿沼市女性防火クラブ連合会単位クラブ会長以上 90名
開催経緯	<p>東日本大震災をはじめ、熊本・能登の地震と日本各地で台風や豪雨による水害、山火事や火山の噴火などが起こり私たちの生活に大きな被害をもたらした。発災直後は被災情報や避難所での様子がメディアで大きく取り上げられ、ボランティアや義援金を募り支援物資も集まる。</p> <p>防災や減災をテーマにしたテレビ番組や書籍が増えてきていることから、災害に関する意識が高まったかのように感じる。</p> <p>日本人は真面目ゆえ熱しやすい反面忘れやすくもあり、半年も経てば培った防災意識は薄れ、用意した防災グッズの使用期限は切れ、どこでどんな被害があったのかすっかり忘れてしまう。それがいわゆる「風化」である。</p> <p>初動の支援はもちろん大切だが、インフラ整備、心のケア、産業復興や災害対策の強化など多岐に亘る息の長い支援が大切。</p> <p>14年前の死者15,900人、行方不明者2,520人と、たくさんの方が犠牲となった震災があったということを忘れて欲しくない。もしも「次」があるのであれば被害を少しでも抑えられる術を身に付けて欲しい。それが犠牲となった方々への供養にも繋がるのではないかとの強い思いからである。</p>
内容	<p>(1) 市名坂東町内会 役員9名が全員女性という町内会、設立18年目。 町内会設立2年目に金融機関でローンを組み集会所を建設。ライフラインの寸断に備え建物はオール電化にして、トイレも障がい者用を含め2箇所設置。避難所ともなる集会所でもいつもと同じような生活が出来るように、「プロの主婦」が見立てたものを「いざ」という時に備えて一通り用意。</p> <p>(2) 東日本大震災～避難所 集会所を避難所とし、4名の役員で備蓄米の準備を行い家から毛布等を持参したりと、避難希望者の全員を受け入れた。避難者の中からリーダーを決め町内会役員がサポートする形での運営。電気は2~3日、水道は3~4日、ガスは1カ月で復旧。避難所は3月20日で閉鎖。 非常事態の中では人の姿が良く見えるもの、嬉しい言葉をかけてくれる人がいる一方で、自分の権利主張ばかりで雰囲気を悪くしてしまう人がいるのも事実。家族と連絡が取れない人、津波の被害があった沿岸部に故郷を持っている人、持病を抱えている人、ペットの元気がなくて心配な人。どこでその心の糸がプツリと切れる</p>

のかは分からない。人の気持ちを思いやることが非常時にはより大切なことなのだ。

(3) 市名坂小学校避難所委員会発足

平成 25 年に設立。市名坂小学校区には 1 万名以上の人が住んでおり小学校を拠点とした町内会、連合町内会、市民センター、児童館、民生委員青年団、PTA、婦人防火クラブ等の 20 の地域団体がある。5 つの町内会から毎年負担金を頂く形で、ゴミ箱やスリッパ、トイレットペーパーや尿漏れパット、筆記用具や折り畳みリヤカー、石油ストーブなどを購入。総務、情報広報、食料物資、救護、衛生、女性コーディネーターの 6 つの班構成で成り立っている。特徴として、女性ならではの視点を大いに生かす「女性コーディネーター」を設けた。

(4) 女性コーディネーター

女性コーディネーターが避難所での困りごとを解決するお手伝いをする。

- 1 トイレを我慢したら尿が漏れ下着が濡れてかゆい
- 2 隣の人のお酒の臭い、女性の化粧品の臭いが気になる
- 3 子供が騒いでも注意しない親がいる

など、よろず相談所と言ったところ。

主婦がメインの部門になることから日常会話からアイデアが浮かんだり、避難所では主婦の知恵を出し合って解決したりと、困っている人から言われてからではなくこちらから手を差し伸べる。尿漏れパットを収容する可愛い布袋を作成、力を入れずにペットボトルの蓋を開けられるペットボトルオープナーの作成など。

(5) 避難所訓練

「いざ」と言う時、誰でも慌てないで避難所を開設できるよう体育館収納庫に、「初期対応手順書」を保管している。仙台市から支給されている仮設トイレは、広くて頑丈ですが組み立てに 40 分ほどかかる。背の低い方や高齢者、力のない方にはとても難しい。実際に組み立てると、便座の位置が高く足が届かないことから踏ん張れないなどの難点も。家庭トイレの扉は便座から見て外向きですが避難所のトイレの扉は内向き。その空間に灯りとしてランタン、トイレットペーパー、汚物入れ、専用スリッパ等を入れるとどうなるでしょうか。実際にその大きさのお部屋を作り、目で見て座って体験してもらった。

(6) 避難所訓練ヘルプコーナー設置

特に乳幼児や妊婦、障害者、高齢者、外国人などいわゆる災害弱者への配慮が不足し、時には心ない言動につながることもある。訓練では視聴覚障害者協会数名も

訓練に参加して頂き実施。聴覚障害の方に対して受付の時点ですぐにヘルプコーナーに案内する。困っていることは何か、今どういった支援が必要なのかなど詳しくタブレットを使い筆談。

(7) 避難所訓練の工夫

- ・運営委員 80 名全員のビブス着用

多くの人でごった返す避難所で誰に声をかけたら良いのかわからない。また誤った情報を流す方もいる。

- ・地域を巻き込む、企業を巻き込む

地元によく住む方の知恵や繋がり、企業目線での情報収集や実行力。

- ・「規則 5 ヶ条」を貼り出し

避難所では「規則」も大切。自分たちの安心安全な避難所生活を守ることに繋がる。「規則 5 ヶ条」は避難所体育館入口に貼り出し[日本語・英語・中国語]の 3 ヶ国語で作成。

(8) 在宅避難について

- ・整理整頓
- ・備蓄用品は家族の誰もが分かるように
- ・米は精米しておく
- ・銀行、生命保険、地震保険、証券に関する大切な情報の管理
- ・気づいたことは、「いつかやろう」と後回しにせずすぐに実践する

(9) 女川町について

宮城県女川町は人口約 1 万人の小さくも活気に満ちた賑やかな漁師町。経済基盤は水産業、加工業、養殖漁業も盛んで住民同士の結びつきが強くみんなが安心して賑やかに生活している町。震災でその人口の 1 割強の 1,000 人の方々が行方不明になったり亡くなった。19mの津波は全てをのみ込み、一瞬にして多くの人の人生を変えてしまった。女川の街は跡形もなく消え、家も道も沢山の人も犬も亡くなった。

避難所ではみんなで協力して励まし合う一方、お金が盗まれたり支援物資をひとり占めしたり、掃除を拒む人がいたりして喧嘩がおこることがある。食事の作り方や食材の切り方、味付けでも言い合いになっていた。

また温かいご支援を頂く一方で、支援物資とは名ばかりの汚れた衣類が届いたり、すぐに伸びてしまう強度のない衣類の処分も大変だった。

被災者を力づけたいとやって来たボランティアの方の歌を聞くために集められた

こともあった。歌を聞くことは被災者全員が望んでいることではないのも事実である。また宗教の勧誘や詐欺まがいの話などもある。

同級生は高台の神社に逃げたのですが、境内ごと流されて海へと消えてしまった。近所のおばさんは、一度は津波から逃げて助かったものの、飼っていた猫を連れに戻り再び襲ってきた津波によって海へ消えていった。女川の町では皆一生懸命町のため、人のため、自分のためと大人も子供も精一杯生きている。みんなが一体となって希望を持ち、新しい街づくりを推し進める故郷の姿に勇気をもらおうと共に心から応援をしている。

*震災対応の第一線でご活躍された町内会管轄の泉消防署松陵出張所・中野所長が寄せてくださったお手紙の一節を紹介

震災深夜、海岸周辺を確認のためバイクを利用し河川堤防を走行し、周辺を確認すると周辺の地形は全く違っており辺り一辺が湖状態で明かりは火災の炎だけでした。震災活動で心に残ったことがあります、捜索活動で次々と搬送される遺体の中で、若いお母さんが津波に遭遇しながらも我が子を離さず抱きかかえたまま亡くなっている姿。自然の脅威と災害の悲惨さを感じるものがありました。その後、ご遺族がこの母子を離すことなく一緒に茶毘にふしたと聞きご冥福を祈った次第です。多くのものを失いましたが、人間として多くのものを得たのも事実で住民の団結・協力することの大切さを改めて感じました。

消防署の方の一時帰宅は6日目。昼夜問わず不眠不休でこの未曾有のすさまじい様々な事に対処し対応してくれましたことに感謝の気持ちで一杯。未だ家族のもとに帰れずにいる2,600人あまりの方々の事を思い祈りが続く日々。

私も夫が赴任先から「一時帰宅」で帰宅したのは6日目。おそらく災害時において非常体制が敷かれる職業を持つ家族はいつも覚悟をしているのではないのでしょうか。多くの命を救ってくださった方、ライフラインに携わる方々最前線で地域社会の安全・安心の確保を支える「地域の守り手」として活躍して頂いた。当たり前のように整備され不自由なく生活を送れていることに感謝しつつ、震災発生直後にもいち早く復旧をすることに力を注いでくださった方々にも頭が上がらない。

誰もが経験したことのない1000年に一度と言われる大震災の中で、それぞれの役目を自分なりに一生懸命に果たした。貴方の役目はみんな違ってそれで良い。とてつもない震災を受けて、人間の無力さ、生命の尊さと儚さ、哀しみの受け止め方、人の優しさを感じ、生かされている私達はしっかりと生きなければならない。そし

て一時、一瞬を大事にして生きなければならない。それが私の答えである。

和尚様が言いました。「草さん、畳の上で亡くなることはとっても幸せなのだよ。ブルーシートもかけられない、頭も手も足も失くしたご遺体。本当に残酷だ。」と。災害は何時どんな時やってくるかわかりません。暑い時か寒い時か、晴れの日か悪天候の日なのか。旅行中かも知れないしお風呂に入っている時かも知れない。いかなる時に被災しても自分や仲間を信じて、自分の役目をきちんと果たすべきである。「震災」「減災」を考えていくと、いきつくところは「健康な身体」が大切。逃げるにも避難所生活を送るにも、足腰が丈夫でないと大変。健康は何事にも代えがたい宝である。



開催地より

- 数年前にも草さんのお話を拝聴したことがあるが、新しいメンバーも増えてまた草さんのお話を聞けることをとても喜んでいる。
- 避難所(学校)での火の扱いについて鹿沼市と話し合いを進めていきたいと思う。
- 家に持ち帰り家族と再度話し合いをしようと思う。